

Sanshirō Chapter 11 (Natsume Sōseki)

このごろ与次郎が学校で文芸協会の切符を売って回っている。二、三日かかって、知ったものへはほぼ売りつけた様子である。与次郎はそれから知らない者をつかまえることにした。たいていは廊下でつかまえる。するとなかなか放さない。どうかこうか、買わせてしまう。時には談判中にベルが鳴って取り逃すこともある。与次郎はこれを時利あらずと号している。時には相手が笑っていて、いつまでも要領を得ないことがある。与次郎はこれを人利あらずと号している。ある時便所から出て来た教授をつかまえた。その教授はハンケチで手をふきながら、今ちょっとと言ったまま急いで図書館へは行ってしまった。それぎりけって出て来ない。与次郎はこれを——なんとも号しなかった。後影を見送って、あれは腸カタルに違いないと三四郎に教えてくれた。

与次郎に切符の販売方を何枚頼まれたのかと聞くと、何枚でも売れるだけ頼まれたのだと言う。あまり売れすぎて演芸場にはいりきれない恐れはないかと聞くと、少しはあると言う。それでは売ったあとで困るだろうと念をおすと、なに大丈夫だ、なかには義理で買う者もあるし、事故で来ないのもあるし、それから腸カタルも少しはできるだろうと言って、すましている。

与次郎が切符を売るところを見ていると、引きかえに金を渡す者からはむろん即座に受け取るが、そうでない学生にはただ切符だけ渡している。気の小さい三四郎が見ると、心配になるくらい渡して歩く。あとから思うとおりにお金がかかるかと聞いてみると、むろん寄らないという。答だ。几帳面にわずか売るよりも、だらしなくたくさん売るほうが、大体のうえにおいて利益だからこうすると言っている。与次郎はこれをタイムス社が日本で百科全書を買った方法に比較している。比較だけはりっぱに聞こえたが、三四郎はなんだか心もとなく思った。そこで一応与次郎に注意した時に、与次郎の返事はおもしろかった。

「相手は東京帝国大学学生だよ」

「いくら学生だって、君のように金にかけるとのん気なのが多いだろう」

「なに善意に払わないのは、文芸協会のほうでもやかましくは言わないはずだ。どうせいくら切符が売れたって、とどのつまりは協会の借金になることは明らかだから」

三四郎は念のため、それは君の意見か、協会の意見かとただしてみた。与次郎は、むろんぼくの意見であって、協会の意見であるとつごうのいいことを答えた。

与次郎の説を聞くと、今度は演芸会を見ない者は、まるでばかのような気がする。ばかのような気がするまで与次郎は講釈をする。それが切符を売るためだか、じっさい演芸会を信仰しているためだか、あるいはただ自分の景気をつけて、かねて相手の景気をつけ、次いでは演芸会の景気をつけて、世上一般の空気をできるだけにぎやかにするためだか、そのところがちょっと明晰に区別が立たないものだから、相手はばかのような気がするにもかかわらず、あまり与次郎の感化をこうむらない。

与次郎は第一に会員の練習に骨を折っている話をする。話どおりに聞いていると、会員の多数は、練習の結果として、当日前に役に立たなくなりそうだ。それから背景の話をする。その背景が大したもの、東京にいる有為の青年画家をことごとく引き上げて、ことごとく応分の技倆を振るわしたようなことになる。次に服装の話をする。その服装が頭から足の先まで故実づくめにでき上がっている。次に脚本の話をする。それが、みんな新作で、みんなおもしろい。そのほかいくらでもある。

与次郎は広田先生と原口さんに招待券を送ったと言っている。野々宮兄妹と里見兄妹には上等の切符を買わせたと言っている。万事が好都合だと言っている。三四郎は与次郎のために演芸会万歳を唱えた。

万歳を唱える晩、与次郎が三四郎の下宿へ来た。昼間とはうって変っている。堅くなって火鉢のそばへすわって寒い寒いと言う。その顔がただ寒いのではないらしい。はじめは火鉢への乗りかかるように手をかざしていたが、やがて懐手になった。三四郎は与次郎の顔を陽気にするために、机の上のランプを端から端へ移した。ところが与次郎は顎をがっくり落して、大きな坊主頭だけを黒く灯に照らしている。いっこうさえない。どうかしたかと聞いた時に、首をあげてランプを見た。

「この家ではまだ電気を引かないのか」と顔つきにはまったく縁のないことを聞いた。

「まだ引かない。そのうち電気にするつもりだそうだ。ランプは暗くていかなね」と答えていると、急に、ランプのことは忘れたとみえて、

「おい、小川、たいへんな事ができてしまった」と言いだした。

一応理由を聞いてみる。与次郎は懐から皺だらけの新聞を出した。二枚重なっている。その一枚をはがして、新しく畳み直して、ここを讀んでみろと差しつけた。読むところを指の頭で押えている。三四郎は目をランプのそばへ寄せた。見出しに大学の純文科とある。

大学の外国文学科は従来西洋人の担当で、当事者はいっさいの授業を外国教師に依頼していたが、時勢の進歩と多数学生の希望に促されて、今度いよいよ本邦人の講義も必須課目として認めるに至った。そこでこのあいだじゅうから適當の人物を人選中であつたが、ようやく某氏に決定して、近々発表になるそうだ。某氏は近き過去において、海外留学の命を受けたことのある秀才だから至極適任だろうという内容である。

「広田先生じゃなかったんだな」と三四郎が与次郎を顧みた。与次郎はやっぱり新聞の上を見ている。

「これはたしかなのか」と三四郎がまた聞いた。

「どうも」と首を曲げたが、「たいてい大丈夫だろうと思つていたんだがな。やりそくなつた。もっともこの男がだいぶ運動をしているという話は聞いたこともあるが」と言う。

「しかしこれだけじゃ、まだ風説じゃないか。いよいよ発表になつてみなければわからないのだから」

「いや、それだけならむろんかまわない。先生の關係したことじゃないから、しかし」と言つて、また残りの新聞を畳み直して、標題を指の頭で押えて、三四郎の目の下へ出した。

今度の新聞にもほぼ同様の事が載っている。そこだけはべつだんに新しい印象を起しよもないが、そのあとへ来て、三四郎は驚かされた。広田先生がたいへんな不徳義漢のよう書いてある。十年間語学の教師をして、世間には杳として聞こえない凡材のくせに、大学で本邦人の外国文学講師を入れると聞くやいなや、急にこそこそ運動を始めて、自分

ひょうばんき がくせいかん る ふ の評判記を学生間に流布した。のみならずその門下生をして「偉大なる暗闇」などという
ろんぶん こざっし そう 論文を小雑誌に草せしめた。この論文は零余子なる匿名のもとにあらわれたが、じつは広田
いえ しゅつにゆう ぶんかだいがくせいおがわ の家に入する文科大学生小川三四郎なるものの筆であることまでわかっている。と、と
なまえ で き うとう三四郎の名前が出て来た。

三四郎は妙な顔をして与次郎を見た。与次郎はまえから三四郎の顔を見ている。ふたり
だま ばらく黙っていた。やがて、三四郎が、

こま 「困るなあ」と言った。すこ 与次郎を恨んでいる。与次郎は、そこはあまりかまっていない。

きみ 「君、これをどう思う」と言う。

とうしょ 投書をそのまま出したに違いない。けっして社のほうで調べたものじゃない。ぶんげいじひょう
ろくごうかつじ 六号活字の投書にこんなのが、いくらでも来る。六号活字はほとんど罪悪のかたまりだ。よく
よく探してみると嘘が多い。目に見えた嘘をついているのもある。なぜそんな愚かな事をやる
かというとね、きみ。みんな利害問題が動機になっているらしい。それでぼくが六号活字を受持
っている時には、性質のよくないのは、たいてい屑籠へ放り込んだ。この記事もまったくそれ
だね。はんたいうんどう けっか 反対運動の結果だ」

「なぜ、君の名が出ないで、ぼくの名が出たものだろうな」

よじろう 与次郎は「そうさ」と言っている。しばらくしてから、

「やっぱり、なんだろう。君は本科生でぼくは選科生だからだろう」と説明した。けれども
さんしろう 三四郎には、これが説明にもなんにもならなかった。三四郎は依然として迷惑である。

「ぜんたいぼくが零余子なんてけちな号を使わずに、堂々と佐々木与次郎と署名しておけば
よかった。じっさいあの論文は佐々木与次郎以外に書ける者は一人もないんだからなあ」

与次郎はまじめである。三四郎に「偉大なる暗闇」の著作権を奪われて、かえって迷惑して
いるのかもしれない。三四郎はばかばかしくなった。

「君、先生に話したか」と聞いた。

「さあ、そこだ。偉大なる暗闇の作者なんか、君だって、ぼくだって、どちらだってかまわな
いが、こと先生の人格に関係してくる以上は、話さずにはいられない。ああいう先生だか
ら、いっこう知りません、何か間違いでしょう、偉大なる暗闇という論文は雑誌に出ました
が、匿名です、先生の崇拜者が書いたものですから御安心なさいくらいに言っておけば、そ
うかで、すぐ済んでしまうわけだが、このさいそうはいかん。どうしたってぼくが責任を明ら
かにしなくっちゃ。事がうまくいって、知らん顔をしているのは、心持ちがいいが、やりそく
な黙っているのは不愉快でたまらない。第一自分が事を起こしておいて、ああいう善良
な人を迷惑な状態に陥らして、それで平気に見物がしておられるものじゃない。正邪
曲直なんてむずかしい問題は別として、ただ気の毒で、いたわしくっていけない」

三四郎ははじめて与次郎を感心な男だと思った。

「先生は新聞を読んだんだらうか」

「家へ来る新聞にゃない。だからぼくも知らなかった。しかし先生は学校へ行っていろいろな
新聞を見るからね。よし先生が見なくってもだれか話すだらう」

「すると、もう知ってるな」

「むろん知ってるだらう」

「君にはなんとも言わないか」

「言わない。もっともろくに話をする暇もないんだから、言わないはずだが。このあいだか
ら演芸会の事でしじゅう奔走しているものだから——ああ演芸会も、もういやになった。や
めてしまおうかしらん。おしろいをつけて、芝居なんかやったって、何がおもしろいものか」

「先生に話したら、君、しかられるだらう」

「しかられるだらう。しかられるのはしかたがないが、いかにも気の毒でね。よけいな事をし
て迷惑をかけてるんだから。——先生は道楽のない人でね。酒は飲まず、煙草は」と言いか
けたが途中でやめてしまった。先生の哲学を鼻から煙にして吹き出す量は月に積もると、
莫大なものである。

「煙草だけはかなりのむが、そのほかになんにもないぜ。釣りをするじゃなし、碁を打つじゃなし、家庭の楽しみがあるじゃなし。あれがいちばんいけない。子供でもあるといいんだけども。じつに枯淡だからなあ」

与次郎はそれで腕組をした。

「たまに、慰めようと思って、少し奔走すると、こんなことになるし。君も先生の所へ行ってやれ」

「行ってやるどころじゃない。ぼくにも多少責任があるから、あやまってくる」

「君はあやまる必要はない」

「じゃ弁解してくる」

与次郎はそれで帰った。三四郎は床にはいってからたびたび寝返りを打った。国にいるほうが寝やすい心持ちがする。偽りの記事——広田先生——美禰子——美禰子を迎えに来て連れていったりっぱな男——いろいろの刺激がある。

夜中からぐっすり寝た。いつものように起きるのが、ひどくつらかった。顔を洗う所で、同じ文科の学生に会った。顔だけは互いに見知り合いである。失敬という挨拶のうちに、この男は例の記事を読んでいらしく推した。しかし先方ではむろん話頭を避けた。三四郎も弁解を試みなかった。

暖かい汁の香をかいでいる時に、また故里の母からの書信に接した。また例のごとく、長かりそうだ。洋服を着換えるのがめんどうだから、着たままの上へ袴をはいて、懐へ手紙を入れて、出る。戸外は薄い霜で光った。

通りへ出ると、ほとんど学生ばかり歩いている。それが、みな同じ方向へ行く。ことごとく急いで行く。寒い往来は若い男の活気でいっぱいになる。そのなかに霜降りの外套を着た広田先生の長い影が見えた。この青年の隊伍に紛れ込んだ先生は、歩調においてすでにアナクロニズムである。左右前後に比較するとすこぶる緩漫に見える。先生の影は校門のうちに隠れた。門内に大きな松がある。巨大の傘のように枝を広げて玄関をふさいでいる。三四

郎の足が門前まで来た時は、先生の影がすでに消えて、正面に見えるものは、松と、松の上にある時計台ばかりであった。この時計台の時計は常に狂っている。もしくは留まっている。

門内をちょっとのぞきこんだ三四郎は、口の中で「ハイドリオタフヒア」という字を二度繰り返した。この字は三四郎の覚えた外国語のうちで、もっとも長い、またもっともむずかしい言葉の一つであった。意味はまだわからない。広田先生に聞いてみるつもりでいる。かつて与次郎に尋ねたら、おそらくダーターファブラのたぐいだろうと言っていた。けれども三四郎から見ると二つのあいだにはたいへんな違いがある。ダーターファブラはおどるべき性質のものと思える。ハイドリオタフヒアは覚えるのにさえ暇がいる。二へん繰り返すと歩調がおのずから緩漫になる。広田先生の使うために古人が作っておいたような音がする。

学校へ行ったら、「偉大なる暗闇」の作者として、衆人の注意を一身に集めている気色が出た。戸外へ出ようとしたが、戸外は存外寒いから廊下にいた。そうして講義のあいだに懐から母の手紙を出して読んだ。

この冬休みには帰って来いと、まるで熊本にいた当時と同様な命令がある。じつは熊本にいた時分にこんなことがあった。学校が休みになるか、ならないのに、帰れという電報が掛かった。母の病気に違いないと思い込んで、驚いて飛んで帰ると、母のほうではこっちに変がなくて、まあ結構だったといわぬばかりに喜んでる。訳を聞くと、いつまで待っていても帰らないから、お稲荷様へ伺いを立てたら、こりゃ、もう熊本をたっているという御託宣であったので、途中でどうかしはせぬだろうかと非常に心配していたのだと言う。三四郎はその当手を思いだして、今度もまた伺いを立てられることかと思った。しかし手紙にはお稲荷様のことは書いてない。ただ三輪田のお光さんも待っていると割注みたようなものがついてる。お光さんは豊津の女学校をやめて、家へ帰ったそうだ。またお光さんに縫ってもらった綿入れが小包で来るそうだ。大工の角三が山で賭博を打って九十円取られたそうだ。——そのてんまつが詳しく書いてある。めんどうだからいいかげんに読んだ。なんでも山を買いたいという男が三人連で入り込んで来たのを、角三が案内をして、山を回って歩いているあいだに取られてしまったのだそうだ。角三は家へ帰って、女房にいつのまに取られたかわからないと弁解した。すると、女房がそれじゃお前さん眠り薬でもかがされたんだろうと言ったら、角三が、うんそういえばなんだかかいたようだと答えたそうだ。けれども村の者は

みんな賭博をして巻き上げられたと評判している。いなかでもこうだから、東京にいるお前などは、本当によく気をつけなくてはいけないという訓誡がついている。

なが てがみ ま おさ よじろう き おんな い
長い手紙を巻き収めていると、与次郎がそばへ来て、「やあ女の手紙だな」と言った。ゆうべよりは冗談をいうだけ元気がいい。三四郎は、

「なに母からだ」と、少しつまらなそうに答えて、封筒ごと懐へ入れた。

「里見のお嬢さんからじゃないのか」

「いいや」

「君、里見のお嬢さんのことを聞いたか」

「何を」と問い返しているところへ、一人の学生が、与次郎に、演芸会の切符をほしいという人が階下に待っていると教えに来てくれた。与次郎はすぐ降りて行った。

与次郎はそれなり消えてなくなった。いくらつらまえようと思っても出て来ない。三四郎はやむをえず精出して講義を筆記していた。講義が済んでから、ゆうべの約束どおり広田先生のうちへ寄る。相変らず静かである。先生は茶の間に長くなって寝ていた。ばあさんに、どうかなすったのかと聞くと、そうじゃないのでしょうか、ゆうべあまりおそくなったので、眠いと言って、さっきお帰りになると、すぐに横におなりなすったのだと言う。長いからだの上に小夜着が掛けてある。三四郎は小さな声で、またばあさんに、どうして、そうおそくなったのかと聞いた。なにいつでもおそいのだが、ゆうべのは勉強じゃなくて、佐々木さんと久しくお話をしておいでだったという答である。勉強が佐々木に代ったから、昼寝をする説明にはならないが、与次郎が、ゆうべ先生に例の話をした事だけはこれで明瞭になった。ついでに与次郎が、どうしかられたかを聞いておきたいのだが、それはばあさんが知ろうはずがないし、肝心の与次郎は学校で取り逃してしまっただけだからしかたがない。きょうの元気のいいところを見ると、大した事件にはならず済んだのだろう。もっとも与次郎の心理現象はどうして三四郎にはわからないのだから、じっさいどんなことがあったか想像はできない。

さんしろう ながひばち まえ てつびん な えんりょ げじょ
三四郎は長火鉢の前へすわった。鉄瓶がちんちん鳴っている。ばあさんは遠慮をして下女
べや ひと
部屋へ引き取った。三四郎はあぐらをかいて、鉄瓶に手をかざして、先生の起きるのを待って
いる。先生はじゆくすい
している。三四郎はしずか
でいい心持ちになった。つめ
爪で鉄瓶をたたいてみ
た。あつ ゆ ちゃわん
熱い湯を茶碗についでふうふう吹いて飲んだ。先生は向こうをむいて寝ている。二、
さんちち あたま か かみ みじ ひげ こ で はな
三日まえに頭を刈ったとみえて、髪がはなはだ短かい。髭のはじが濃く出ている。鼻も向こ
うを向いている。はな あな
鼻の穴がすうすう言う。あんみん
安眠だ。

三四郎はかえ おも も き だ よ ひろ
返そうと思って、持って来たハイドリオタフヒアを出して読みはじめた。ぽつぽつ拾
い読みをする。なかなかわからない。はか なか はな な
墓の中に花を投げるのが書いてある。ローマ人は薔薇
をアFFECTすると書いてある。なんのいみだかよくし
知らないが、おおかたこのやく
好むとでも訳するん
だろうと思った。ギリシア人はじん アマランスもち
Amaranthを用いると書いてある。これもめいりょう
明瞭でない。しかし
花の名には違いない。それから少しさきへ行くと、まるでわからなくなった。ページから目を
はな
離して先生を見た。まだ寝ている。なんでこんなむずかしいしよもつ じぶん か
書物を自分に貸したものだろうと
思った。それから、このむずかしい書物が、なぜわからないながらも、自分のきょうみ
興味をひくのだ
ろうと思った。さいご ひろたせんせい ひっきょう
最後に広田先生は必 竟ハイドリオタフヒアだと思った。

そうすると、広田先生がむくりとおきた。くび も あ
首だけ持ち上げて、三四郎を見た。

「いつ来たの」と聞いた。さんしろう ね すす たいくつ
三四郎はもっと寝ておいでなさいと勧めた。じっさい退屈ではなか
ったのである。せんせい
先生は、

「いや起きる」と言って起きた。それかられい てつがく けむり ふ ちんもく
例のごとく哲学の煙を吹きはじめた。煙が沈黙の
あいだに、ぼう
棒になって出る。

「ありがとうございます。しよもつ かえ
書物を返します」

「ああ。――よ
読んだの」

「読んだけれどもよくわかりません。だいいちひょうだい
第一標題がわかりません」

「ハイドリオタフヒア」

「なんのことですか」

「なんのことかぼくにもわからない。とにかくギリシア語らしいね」

三四郎はあとを尋ねる^{たず}勇気が^{ゆうき}抜けて^ぬしまった。先生はあくびを^{ひと}一つした。

「ああ眠^{ねむ}かった。いい心持ち^{こころも}に寝^{ゆめ}た。おもしろい夢^みを見てね」

先生は女^{おんな}の夢だと言っている。それを話す^{はな}のかと思^{おも}ったら、湯^ゆに行かないかと言^いいだした。
二人は手ぬぐい^{ふたり}をさ^てげて出^でかけた。

湯からあ^あがって、二人が板^{いた}の間^まにすえてある器械^{きかい}の上^{うえ}に乗^のって、身長^{たけ}を測^{はか}ってみた。広田^{ひろた}
先生は五尺六寸^{せんせい}ある。三四郎は四寸五分^{よんすんごぶ}しかない。

「まだのびるかもしれない」と広田先生が三四郎に言った。

「もうだめです。三年^{さんねんらい}来このとおりで」と三四郎^{こた}が答^{こた}えた。

「そうかな」と先生が言^いった。自分^{じぶん}をよっぽど子供^{こども}のように考^{かんが}えているのだと三四郎は思^{おも}った。家^{いえ}へ帰^{かえ}った時^{とき}、先生^{せんせい}が、用^{よう}がなければ話^わしていてもかまわないと、書齋^{しょさい}の戸^とをあけて、自分^{じぶん}がさきへは^いった。三四郎はとにかく、例^{れい}の用事^{ようじ}を片^{かた}づける義務^{ぎむ}があるから、続^{つづ}いては^いった。

「佐々木^{ささき}は、まだ帰^{かえ}らないようですな」

「きょうはおそくなるとか言^いって断^{こと}わっていた。このあいだから演芸会^{えんげいかい}のことでだいぶん
奔走^{ほんそう}しているようだが、世話^{せわ}好き^ずなんだか、駆け回^{かまわ}ることが好き^すなんだか、いっこう要領^{ようりょう}を
得^えない男^{おとこ}だ」

「親切^{しんせつ}なんですよ」

「目的^{もくてき}だけは親切^{しんせつ}なところも少^{すこ}しあるんだが、なにしろ、頭^{あたま}のでき^{ふしんせつ}がはなはだ不親切^{ふしんせつ}なもの
だから、ろくなことはしでかさない。ちょっと見^みると、要領^{ようりょう}を得^えている。むしろ得^えすぎてい
る。けれども終局^{しゅうきよく}へゆくと、なんのために要領^{ようりょう}を得^えてきたのだか、まるでめちやくちやにな
ってしまう。いくら言^いっても直^{なお}さないからほうっておく。あれは悪戯^{いたずら}をしに世^よの中^{なか}へ生まれて
来^きた男^{おとこ}だね」

さんしろう べんご みち おも げん けっか わる じつれい
三四郎はなんとか弁護の道がありそうなものだと思ったが、現に結果の悪い実例があるんだから、しょうがない。話を転じた。

「あの新聞の記事を御覧でしたか」

「ええ、見た」

「新聞に出るまではちっとも御存じなかったのですか」

「いいえ」

「お驚きなすったでしょう」

「驚くって——それはまったく驚かないこともない。けれども世の中の事はみんな、あんなものだと思ってるから、若い人ほど正直に驚きはしない」

「御迷惑でしょう」

「迷惑でないこともない。けれどもぼくくらい世の中に住み古した年配の人間なら、あの記事を見て、すぐ事実だと思ひ込む人ばかりもないから、やっぱり若い人ほど正直に迷惑とは感じない。与次郎は社員に知った者があるから、その男に頼んで真相を書いてもらうの、あの投書の出所を捜して制裁を加えるの、自分の雑誌で十分反駁をいたしますのと、善後策の了見でくだらない事をいろいろ言うが、そんな手数をやるならば、はじめからよけいな事を起こさないほうが、いくらいいかわかりやしない」

「まったく先生のためを思ったからです。悪気じゃないです」

「悪気でやられてたまるものか。第一ぼくのために運動をするものがさ、ぼくの意向も聞かないで、かってな方法を講じたりかってな方針を立てたひには、最初からぼくの存在を愚弄していると同じことじゃないか。存在を無視されているほうが、どのくらい体面を保つにつごうがいいかしれやしない」

さんしろう だま
三四郎はしかたなしに黙っていた。

「^{いだい}「^{くらやみ}そうして、偉大なる暗闇^ぐなんて愚にもつかないもの^かを書いて。——新聞^{しんぶん}には君^{きみ}が書いたとしてあるが^{じっさい}実際は佐々木^{ささき}が書いたんだってね」

「そうです」

「^{じはく}ゆうべ佐々木^{めいわく}が自白した。君こそ迷惑^{ぶんしょう}だろう。あんなばかな文章^{ぶつ}は佐々木よりほかに書くものはありやしない。ぼくも^よ読んでみた。実質^{じっしつ}もなければ、品位^{ひんい}もない、まるで救世軍^{きゅうせいぐん}の太鼓^{たいこ}のようなものだ。読者^{どくしゃ}の悪感情^{あくかんじょう}を引き起こすために、書いてるとしか思われやしない。^{てつとうつび}徹頭徹尾^{こい}故意^なだけで成り立^たっている。常識^{じょうしき}のある者^みが見れば、どうしても^いため^いにするところ^いがあつて起稿^{きこう}したものだと判定^{はんてい}がつく。あれじゃぼくが門下生^{もんかせい}に書かしたと言^いわれるはずだ。あれを^{とき}読んだ時^{とき}には、なるほど新聞^{しんぶん}の記事^{きじ}はもつともだと思^いった」

^{ひろたせんせい}広田先生^{はなし}はそれで話^きを切^{はな}った。鼻^{はな}から例^{れい}によって煙^{けむり}をはく。与次郎^{よじろう}はこの煙^{けむり}の出方^{でかた}で、先生^{せんせい}の気分^{きぶん}をうかがうことができると言^いっている。濃^こくまっすぐにほとぼしる時は、哲学^{てつがく}の絶好頂^{ぜつこうちよう}に達^{たつ}したさいで、ゆるくくずれる時は、心気^{しんき}平穩^{へいおん}、ことによるとひやかされる^{おそ}恐れがある。煙^{けむり}が、鼻^{はな}の下^{した}に低徊^{ていかい}して、髭^{ひげ}に未練^{みれん}があるように見える時は、冥想^{めいそう}に入る。もしくは詩^し的^{てき}感興^{かんきよう}がある。もつとも恐^{おそ}るべきは穴^{あな}の先^{さき}の渦^{うず}である。渦^{うず}が出ると、たいへんに^きしかられる。与次郎^{よじろう}の言うことだから、三四郎^{しやうら}はむろんあてにはしない。しかしこのさいだから^き気をつけて煙^{けむり}の形状^{かたち}をながめていた。すると与次郎^{よじろう}の言^いったような判然^{はんぜん}たる煙^{けむり}はちつとも出^でて来^こない。その代^{かわ}り出^でるものは、たいてい^{しかく}な資格^{しかく}をみんなそなえている。

^{さんしろう}三四郎^{さんしろう}がいつまでたつても、恐^{おそ}れ入^いったように控^{ひか}えているので、先生^{せんせい}はまた話^{はなし}しはじめた。

「^す済^{こと}んだ事は、もうやめよう。佐々木^{ささき}も昨夜^{さくや}ことごとくあやまってしまったから、きょうあたりはまた晴^{せいせい}々^{れい}して例^{れい}のごとく飛^とんで歩^{ある}いているだろう。いくら陰^{かげ}で不心得^{ふこころえ}を責^せめたつて、^{どうにん}当^{へいき}人が平氣^{きつぷ}で切符^{きつぷ}なんぞ売^うって歩^{ある}いてはしかたがない。それよりもつとおもしろい話^{はなし}をしよう」

「ええ」

「ぼくが^{ひるね}さつき昼寝^{とき}をしている時^{とき}、おもしろい夢^{ゆめ}を見た。それはね、ぼくが生涯^{しょうがい}に^{いっ}たった一^{いっ}ぺん会^あった女^{おんな}に、突然^{とつぜん}夢^{ゆめ}の中で再会^{なか}したという小^{さいかい}説^{しょうせつ}じみたお話を、そのほう^{しんぶん}が、新聞^{しんぶん}の記事^{きじ}より聞^きいていても愉快^{ゆかい}だよ」

「ええ。どんな女ですか」

「十二、三のきれいな女だ。顔に黒子がある」

三四郎は十二、三と聞いて少し失望した。

「いつごろお会いになったのですか」

「二十年前ばかりまえ」

三四郎はまた驚いた。

「よくその女ということがわかりましたね」

「夢だよ。夢だからわかるさ。そうして夢だから不思議でいい。ぼくがなんでも大きな森の中を歩いている。あの色のさめた夏の洋服を着てね、あの古い帽子をかぶって。——そうその時はなんでも、むずかしい事を考えていた。すべて宇宙の法則は変らないが、法則に支配されるすべて宇宙のものは必ず変る。するとその法則は、物のほかに存在してはいなくてはならない。——さめてみるとつまらないが夢の中だからまじめにそんな事を考えて森の下を通って行くと、突然その女に会った。行き会ったのではない。向こうはじっと立っていた。見ると、昔のとおり顔をしている。昔のとおり服装をしている。髪も昔の髪である。黒子もむろんあった。つまり二十年まえ見た時と少しも変らない十二、三の女である。ぼくがその女に、あなたは少しも変らないというと、その女はぼくにたいへん年をお取りなすったという。次にぼくが、あなたはどうして、そう変らずにいるのかと聞くと、この顔の年、この服装の月、この髪の日がいちばん好きだから、こうしていると言う。それはいつの事かと聞くと、二十年まえ、あなたにお目にかかった時だという。それならぼくはなぜこう年を取ったんだろうと、自分で不思議がると、女が、あなたは、その時よりも、もっと美しいほうへほうへとお移りなさりたがるからだと教えてくれた。その時ぼくが女に、あなたは絵だと言うと、女がぼくに、あなたは詩だと言った」

「それからどうしました」と三四郎が聞いた。

「それから君が来たのさ」と言う。

「二十^{にじゅうねん}年^あまえ^{ゆめ}に会^{ほんとう}った^{じじつ}という^{ほんとう}のは^{じじつ}夢^{じじつ}じゃない、本^{ほんとう}当^{じじつ}の事^{じじつ}実^{じじつ}なん^{じじつ}ですか」

「本^{ほんとう}当^{じじつ}の事^{じじつ}実^{じじつ}なん^{じじつ}だ^{じじつ}か^{じじつ}ら^{じじつ}お^{じじつ}も^{じじつ}し^{じじつ}ろ^{じじつ}い^{じじつ}」

「ど^{どこ}こ^{どこ}で^{どこ}お^{どこ}会^{どこ}い^{どこ}に^{どこ}な^{どこ}っ^{どこ}た^{どこ}ん^{どこ}で^{どこ}す^{どこ}か^{どこ}」

せんせい はな けむり ふ だ どうぶんだま
先生^{せんせい}の鼻^{はな}はまた煙^{けむり}を吹^ふき出^だした。その煙^{けむり}をな^なが^なめ^めて、当^{どうぶんだま}分^{どうぶんだま}黙^{どうぶんだま}っ^{どうぶんだま}て^{どうぶんだま}い^{どうぶんだま}る。や^やが^がて^てこ^こう^う言^いっ^つた。

けんぽうはっぶ めいじにじゅうにねん ときもりもんぶだいじん ころ おぼ
「憲^{けんぽう}法^{はっぶ}発^{めいじ}布^{にじゅう}は^{にねん}明^{とき}治^{もり}二^{もん}十^ぶ二^{だい}年^{じん}だ^{ころ}っ^{おぼ}た^{おぼ}ね。そ^{おぼ}の^{おぼ}時^{おぼ}森^{おぼ}文^{おぼ}部^{おぼ}大^{おぼ}臣^{おぼ}が^{おぼ}殺^{おぼ}さ^{おぼ}れ^{おぼ}た。君^{おぼ}は^{おぼ}覚^{おぼ}え^{おぼ}て^{おぼ}い^{おぼ}ま^{おぼ}い。い^{おぼ}く^{おぼ}つ^{おぼ}か^{おぼ}な^{おぼ}君^{おぼ}は。そ^{おぼ}う、そ^{おぼ}れ^{おぼ}じ^{おぼ}ゃ、ま^{おぼ}だ^{おぼ}赤^{あか}ん^{ぼう}坊^{じぶん}の^{おぼ}時^{おぼ}分^{おぼ}だ。ぼ^{おぼ}く^{おぼ}は^{おぼ}高^{こう}等^{とう}学^{がっ}校^{こう}の^{おぼ}生^{せい}徒^とで^{おぼ}あ^{おぼ}っ^{おぼ}た。

だいじん そうしき さんれつ てっぽう で ぼち い おも
大^{だい}臣^{じん}の^{おぼ}葬^{おぼ}式^{おぼ}に^{おぼ}参^{おぼ}列^{おぼ}す^{おぼ}る^{おぼ}の^{おぼ}だ^{おぼ}と^{おぼ}言^{おぼ}っ^{おぼ}て、お^おお^おぜ^おい^お鉄^て砲^{ぽう}を^おか^おつ^おい^おで^お出^おた。墓^ぼ地^ちへ^お行^いく^いの^おだ^おと^お思^{おも}っ^{おも}たら、そ^おう^おで^おは^おな^おい。体^{たい}操^{そう}の^お教^{きょう}師^しが^お竹^{たけ}橋^{ばし}内^{うち}へ^お引^ひっ^お張^ばっ^おて^お行^いっ^おて、道^{みち}ば^おた^おへ^お整^{せい}列^{れつ}さ^おし^おた。

われわれ た ひつぎ おく な
我^{われ}々^{われ}は^おそ^おこ^おへ^お立^たっ^おた^おなり、大^{だい}臣^{じん}の^お枢^{ひつぎ}を^お送^{おく}る^おこ^おに^おな^おっ^おた。名^なは^お送^{おく}る^おの^おだ^おけ^おれ^おど^おも、じ^おつ^おは^お見^{けん}物^{ぶつ}し^おた^おの^おも^お同^{どう}然^{ぜん}だ^おっ^おた。そ^おの^お日^ひは^お寒^{さむ}い^お日^ひで^おね、今^{いま}で^おも^お覚^{おぼ}え^おて^おい^おる。動^{うご}か^おず^おに^お立^たっ^おて^おい^おる

くつ した あし いた となり おとこ み あか
と、靴^{くつ}の^お下^{した}で^お足^{あし}が^お痛^{いた}む。隣^{となり}の^お男^{おとこ}が^おぼ^おく^おの^お鼻^みを^お見^{あか}て^おは^お赤^{あか}い^お赤^{あか}い^おと^お言^いっ^おた。や^おが^おて^お行^{ぎょう}列^{れつ}が^お来^きた。なん^おで^おも^お長^{なが}い^おも^おの^おだ^おっ^おた。寒^めい^お目^めの^お前^{まえ}を^お静^{しず}か^おな^お馬^ば車^{しゃ}や^お俣^{くま}が^お何^{なん}台^{だい}と^おな^おく^お通^{とお}る。そ^おの^おう^おち^おに^お今^{いま}話^わし^おた^お小^こさ^おな^お娘^{むすめ}が^おい^おた。今^{いま}、そ^おの^お時^{とき}の^お模^も様^{よう}を^お思^{おも}い^お出^だそ^おう^おと^おし^おて^おも、ぼ^おう^おと^おし^おて^おと^おて^おも

めいりょう う こ おんな とし
明^{めい}瞭^{りょう}に^お浮^うか^おん^おで^お来^こない。た^おだ^おこ^おの^お女^{おんな}だ^おけ^おは^お覚^{おぼ}え^おて^おい^おる。そ^おれ^おも^お年^{とし}を^おた^おつ^おに^おし^おた^おが^おっ^おて^おだ^おん

うす き
だ^だん^だ薄^{うす}ら^だい^だで^だ来^きた、今^{いま}で^おは^お思^{おも}い^お出^だす^おこ^おも^おめ^おつ^おた^おに^おな^おい。き^おょう^お夢^むを^お見^みる^おま^おえ^おま^おで^おは、ま^おる^おで^おわ^おす

わす どうじ あたま なか や あつ いんしょう も
忘^{わす}れ^おて^おい^おた、け^おれ^おど^おも^おそ^おの^お当^{どう}時^じは^お頭^{あたま}の^お中^{なか}へ^お焼^やき^おつ^おけ^おら^おれ^おた^およ^おう^おに^お熱^{あつ}い^お印^{いん}象^{しょう}を^お持^もっ^おて^おい^おた。

みょう
—— 妙^{みょう}な^おも^おの^おだ^お」

「そ^おれ^おか^おら^おそ^おの^お女^{おんな}に^おは^おま^おる^おで^お会^あわ^あな^あい^あん^あで^あす^あか^あ」

「ま^おる^おで^お会^あわ^あな^あい^あ」

「じ^おゃ、ど^おこ^おの^おだ^おれ^おだ^おか^おま^おつ^おた^おく^おわ^おか^おら^おな^おい^おん^おで^おす^おか^お」

「む^おろ^おん^おわ^おか^おら^おな^おい^お」

「^{たず}尋^{たず}ね^{たず}て^{たず}み^{たず}な^{たず}か^{たず}つ^{たず}た^{たず}で^{たず}す^{たず}か^{たず}」

「い^おい^おや^お」

「先^お生^おは^おそ^おれ^おで^お.....」と^お言^いっ^おた^おが^お急^{きゅう}に^おつ^おか^おえ^おた。

「それで？」

「それで結婚をなさらないんですか」

先生は笑いだした。

「それほど浪漫的な人間じゃない。ぼくは君よりもはるかに散文的にできている」

「しかし、もしその女が来たらおもらいになったでしょう」

「そうさね」と一度考えたうえで、「もらったろうね」と言った。三四郎は気の毒なような顔をしている。すると先生がまた話し出した。

「そのために独身を余儀なくされたというと、ぼくがその女のために不具にされたと同じ事になる。けれども人間には生まれついて、結婚のできない不具もあるし。そのほかいろいろ結婚のしにくい事情を持っている者がある」

「そんなに結婚を妨げる事情が世の中にたくさんあるでしょうか」

先生は煙の間から、じっと三四郎を見ていた。

「ハムレットは結婚しなくなかったんだらう。ハムレットは一人しかいないかもしれないが、あれに似た人はたくさんいる」

「たとえばどんな人です」

「たとえば」と言って、先生は黙った。煙がしきりに出る。「たとえば、ここに一人の男がいる。父は早く死んで、母一人を頼りに育ったとする。その母がまた病気にかかって、いよいよ息を引き取るといふ、まぎわに、自分が死んだら誰某の世話になれという。子供が会ったこともない、知りもしない人を指名する。理由を聞くと、母がなんとも答ええない。しいて聞くとじつは誰某がお前の本当のおとっさんだとかすかな声で言った。——まあ話だが、そういう母を持った子がいるとする。すると、その子が結婚に信仰を置かなくなるのはむろんだらう」

「そんな人はめったにないでしょう」

「めったには無^ないだろうが、いることはいる」

「しかし先生のは、そんなのじゃないでしょう」

先生はハハハハと笑った。

「君はたしかおっかさんがいたね」

「ええ」

「おとっさんは」

「死にました」

「ぼくの母は憲^{けん}法^{ぽう}発^は布^っの翌^{よく}年^{ねん}に死んだ」